

同一視をなくすこと

～1971年8月 アメリカ合衆国、ワシントン州、バック・クリークⅢの
ワークショップにて～

多くのパターンは、良い感じを与えます。たとえば、「たばこのよい味わい」です。同一視は、否定的であるかどうかということより、『肯定的』であるかどうかということのほうで、よりいっそう積極的に徹底して取り組まなければいけないのです。

もしカウンセラーであるあなたがクライアントに「私を見て誰を思い出すの？」と聞いたとき、「あのばかなフットボールのコーチ！」と答えたら、セッションを先に進める前にクライアントにその髪のないフットボールのコーチについて思い出して話すようにさせなければなりません。しかし、もしクライアントが「誰のことも思い出さないな。あなたは、ただ今までに会った人の中で一番素敵な人だよ。」と答えたら、すぐにそれに取り組み始めたほうがいいでしょう。これは、まだ会ったこともない最愛の人とあなたを同一視しているというただの非合理的なことです。同一視は知性の邪魔をし、傷を隠してしまうのです。クライアントが考えられるようになるためには、あなたがこの傷に立ち向かい、この傷を取り除かなければいけません。もしクライアントがあなた自身を見ているなら、唯一の個性的な一人の人間としてのあなたを本当に見ているとすれば、この気持ち悪いばかげた感情はなくなり、ただあなたを愛するでしょう。

クライアントとして「あなたのことが大好きだよ。」と6回言ったら、この言葉の意味は変わります。あなたがセッションでそのように取り組めば、この言葉を取り巻く感情は劇的に変わるでしょう。

あらゆる同一視をなくそうとすべきです。その後残るのは人と人の愛情で、それは実に素敵なことです。これは自動的に起こりうるものではなく、知恵と人と人との関わり合いから生まれてくるのです。

Cleaning up Identifications

プレゼントタイム2007年4月号 14 ページより

Harvey Jackins

翻訳 五十嵐 淑子

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります。(翻訳文 2007 年。原文 1971 年)。
この翻訳はあくまで草稿として扱ってください。